
織斑家の最強お父さん！

親バカ最強親父様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

織斑家の最強お父さん！

【Nコード】

N7710X

【作者名】

親バカ最強親父様

【あらすじ】

ニート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに……。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろう。二人が立派に育つその日まで……。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕なり！

パパ、始めました（前書き）

ネギま！にとあるが浮かばなくなったから息抜き。

もうひとつのISは真面目に書いてるから息抜きにならん。

パパ、始めました

本日は晴天なり。

空には憎たらしいほど太陽がさんさんと言うよりかんかん照っております。

自己紹介をしよう。俺の名前は織斑春樹。

年は三十路、詳しく言えば三十二歳。バリバリのおっさんをしてい
ます。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめてニート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが・・・

兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられない
から・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そりゃない
ゼマイシスター」

「あ、あの・・・よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。

玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と息子が手紙を
持って現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿二人……！子供を押し付けて蒸発しやがったな……！

「……ん~~~~~まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します……」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞆と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると何をしたらいいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張ってソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「……おい。まさか秋枝^{あきえ}はお前らを残して消えたのか？」

「……それは……」

「ああ……いい、いい。無理に話さなくていいわ」

ココアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すときっぱり少し暗い顔して俯いた。

「……んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋枝の夫）とどこかに行つたんだろ。」

昔に親父に勘当されたくせに俺を頼るとは死にたいのかあの馬鹿は？
やはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働かずに秋枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか……。

「んー、行く宛はあるか？」

「……ない、です……。」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時に病気で死んでる。

親戚はいるがどいつもこいつもろくでなしだからな……。

……仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わって俺がお前らの親父になってやるよ」

「え、で、でも！春樹叔父さんに迷惑が……きゃうー！？」

バチンとデコピンをするとマイシスターの娘は額を押さえて涙目で見えてきた。

さあてさて。まずは組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・！」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし育児放棄したらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、もしも組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝が育児放棄するのが見えていたようだ。

取り敢えず昔に世話になった人達に電話をして養子縁組申請せねば。額を押さえながらおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうおやつさん。助かったよ」

『気にすんな春坊。死んだオジキからの頼みだからいくらでも言えや！他にすることないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがとう。じやあな」

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするのについていけない娘に目を向ける。

「おい」

「は、ひゃい!？」

「出掛けるぞ。上着を着ろ」

「え?え?」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負った時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負つと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負つとマンションの一室から出て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。
養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあやす。

昔から親戚のガキの面倒を見てたから慣れたものだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・！」

「いやあああああつ！！織斑さんが子供を連れてるううううう！！」

「神は死んだ！狙ってたのにいいいい！！」

そんな声が聞こえたのはご愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシスターの子供は俺の養子となった。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あったがまずはマンションに帰ることにした。

「というわけで今日から親父と呼びたまえ」

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしる。部屋はまだあるからそこ使っか？そつちは俺が面倒見なきゃならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、次顔見せたら潰す」

「（・・・あ、あの人が言った通りに怖い人だ・・・）」

・・・・織斑春樹。二児のパパになりました。
娘、織斑千冬。おりむら ちふゆ 息子、織斑一夏。おりむら いちか

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。
現在住所ちよい高めのマンション。
残金・・・二億七千万。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”ラストサムライと呼ばれる人類最強。
現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕！

パパ、始めました（後書き）

簡単なプロフィール。

織斑春樹

三十二歳

無職。ニートとも言う。

身長は184、体重は58、体脂肪率3%以下の女の敵。体は鍛えてる方。かなりの傷があり。

千冬のように黒髪を後ろで纏めて伸ばしている。目は突然変異のルビーのような赤色。顔は整い、千冬にそっくり。この場合は千冬が春樹にそっくりである。

趣味はゲームに料理。任侠の女性に学ぶ。

“最後の侍”^{ラストサムライ}と呼ばれ、人類最強の戦闘力を持つ。ISを素手で破壊するほど。

ちなみにドS。理不尽極まりない性格であり、将来は千冬がそれを
受け継ぐ・・・。

パパ、頑張る（前書き）

取り敢えず一話だけ投稿。

というか一晩過ぎてお気に入りが増えるのにビクって珈琲吐き出
したぞ。

前話にて千冬の年齢を七歳から九歳に変更。
こちらの方が何かといい気がしたんで。

前話のプロフィールは春樹は千冬っばい。でわかっていただければ
体脂肪率3%は可笑しいか？うちの叔父なんかリアルに体脂肪率3
%に近いんだけど。
しかも元自衛隊。

パパ、頑張る

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。というか日差しに当たりながら昼寝をしております。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子にサンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにNewパパさんであるわたくしは育児のめんどくささにダウンして死んでおります。

甘かった・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減ってもギャーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・。
軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で逃げやがったな。

「・・・すー・・・すー・・・にへへ」

「・・・涎がダラダラやん。これ、お気に入りのシャツなんだがな」

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染みを作りまくってやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メって写メって〜。

二人、千冬と一夏を引き取ってからすでに一ヶ月。秋枝の馬鹿は姿は見せないから徐々に説教のレベルを上げようと思うこの頃。

千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入り
の料理はきんぴらごぼつである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボデーなのでミルクを飲ませてる。

昔にやったことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は
会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほっ」

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を
伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でフィッシング。

テレビをポチッとつけてお昼の定番の笑っていいかもを試聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。

日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しな
から試聴試聴。

「・・・にへへへ・・・お父さん・・・」

「あぁっ！千冬の奴、さらに涎を!？」

定番のいいかも〜！を言った途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。

長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押し退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

「離せ千冬！冷たいんだよゴラァ・・・あぁっ！洗濯物干さなきゃ！」

「でへへへ・・・」

仕方がなく、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。

ちなみに二人に買い与えた服は二桁を越えている。正直、服なんかわからんから適当に買った。

予算はユククにて買ったため、一万以内。

一夏はベビー　らすで服やらガラガラやらオモチヤを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の金が消えていきます。

駄菓子菓子!!!

親父が残してくれた金をおやっさんがくれたので口座の金の桁が跳ね上がる!!

・・・最初見たときは目を疑ったね。0の桁が二つ上がったもん。
親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴラァ・・・。

「今日は天気がいいからもう少し干すか。とつかいい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にセミよろしくへばりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬ごとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込もうと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら寝てやがった。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーッ、アホーッ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなって暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇 拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから二人で鍋をつつくことにした。

「夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。ミルクを飲んでいたまえ。」

「あ！お父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食つのも食われるのも当たり前なのだよ千冬！」

「！？し、知らなかった・・・！さすがお父さん！勉強になる！」

・・・ふっ。チヨロいな・・・ガキなんざこれにて封殺できるのさ。

大人気ないな俺。

そして将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをどっぴり入れて完食。二人分だから腹はちよつどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナニコレ？奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言う千冬の後ろにはバタバタ手足を動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座って緑茶を飲みながらホッと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いといてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しずつ生えてるがまだクソ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かった。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

パシャパシャとシャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲った状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・まだチ コは小さいな・・・俺は大口径マグナムだが。

「うー、あー、あー」

「ん？もう出るのか・・・って眠たそうだな。頭がカクンカクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考えてると一夏がうとうとし始めたため、冷めないよ

うに丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた！

脱力しながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言った。
なのに千冬は一緒に入る！と言って聞かないため、仕方なく入浴。
俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし・・・」

「そ、そう・・・やった・・・」

湯船に二人で浸かりながら話すと予定ができた。

こういうのを話していると千冬が成長していると実感できる気がする。

こうして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつものごとく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしながら
熟睡開始。

織斑春樹、三十二歳。

織斑千冬、九歳。

織斑一夏、一歳。

今日も元気に過ごせました。まる。

パパ、頑張る（後書き）

しばらくはほのぼのと書きます。

この頃の千冬は捨てられてあなりました。春樹がいるため改変。原作の千冬の正確には近いが少しあれ。みたいな感じに。

ちなみにヒロインはいません。今のところは。
ー夏ラヴァーズを応援する立場になりそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

織斑家の最強お父さん！

2011年10月21日09時59分発行